

邯鄲の夢と異国イメージ

―黒本『初夢かんとんの枕』を中心に―

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻 虞 雪健

要 旨

唐代伝奇『枕中記』が源泉となる有名な「邯鄲の夢」の故事は、『太平記』（流布本）巻二十五「自伊勢進宝剣事付黄梁夢事」、謡曲『邯鄲』での改変を経て、近世では重要な趣向としてよく生かされ、数多くの戯作に影響を及ぼした。黄表紙の嚆矢として高く評価される『金々先生栄花夢』はまさしくこの趣向をとったものである。

本稿で扱う黒本『初夢かんとんの枕』は『金々先生栄花夢』に先行し、異国を舞台とする近松門左衛門の浄瑠璃及び唐人行列にかかわるものなどを積極的に取り入れることで、異国情緒ある「唐人の邯鄲の夢」が巧みに表現された。本稿では作品の刊年を改めて確認しつつ、本文の典拠を明らかにした上で、黒本『初夢』から「邯鄲の夢」の故事の受容を考察し、そしてそこで表現される江戸時代の対「異国」観や、そのイメージの変容を明らかにすることを目的とする。

黒本『初夢かんとんの枕』の刊年について、『朝倉年表』『山崎年表』ともに年代未詳とする。本稿では、先行研究を踏まえながら、黒・青本の絵師の連名や、作中の文句に見られる関連情報を参考することで、宝暦五（一七七五）年正月の刊行という新説をあげた。

本文の典拠を明らかにすることにより、黒本『初夢かんとんの枕』では謡曲『邯鄲』の詞章を多く利用すること、『太平記』黄梁夢事の筋を用いること、浄瑠璃「国性爺合戦」「大職冠」の詞章を持ち込むことで謡曲『邯鄲』『太平記』黄梁夢事と類似する人物や筋を重ね合わせ、機知的に物語を展開させること等が判明した。

また、挿絵やそれともなう地の文やセリフを考察することにより、黒本『初夢かんとんの枕』では朝鮮通信使の影響を受けて形成した舞台やパレードを生かし、大きな唐人の夢の世界を創ったことと、歌舞伎や浄瑠璃、流行唄と当時の風俗に基づく地口、茶化しなどを通じて、作者が朝鮮通信使にかかわるものを借りて、「ウチ・日本」と対置される唐人のことを戯れること等が確認された。

キーワード：邯鄲の夢 異国 唐人 朝鮮通信使 黒本 刊年 浄瑠璃 歌舞伎

The Dream of Kantan and the Image of Tojin

YU Xuejian

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The famous story of Kantan's Dream, which originates from the Chuanqi "The World Inside a Pillow", was often used as an important literary mechanism in the early modern period in Japan and influenced many *gesaku* (light literature) works. Professor Kinkin's Dream of Splendor, for example, which is highly regarded as the beginning of *Kibyoshi* (illustrated storybooks with yellow covers), used precisely this mechanism.

The First Dream of Kantan's Pillow actively incorporates elements related to *ningyo joruri* written by CHIKAMATSU Monzaemon and *Tojin gyoretsu*, which make the story full of exoticism.

Based on confirmation of the sources of the relevant documents, this paper re-examined the publication year of the text of The First Dream of Kantan's Pillow and examined how the mechanism of Kantan's Dream is utilized, how the exotic text is created, and how the Tojin is depicted in the text.

Based on prior studies, this paper also examined the names of multiple illustrators involved and relevant information suggested by words and sentences in the text, and as a result, put forward a new hypothesis about its publication year.

By clarifying the source of the text, it was found that many words and sentences in the work are cited from the Noh play *Kantan* and that the plot related to Golden Millet Dream in the *Taiheiki* underlies this work. In addition to these elements, it also achieves the effect of popularization and making an interesting development by quoting words and sentences in *ningyo joruri* plays including The Battles of Coxinga and The Stolen Crystal Jewel.

Finally, this paper explains how this work makes full use of *Ningyo joruri* and *Tojin gyoretsu*, which was created, inspired by Joseon missions to Japan, to construct the dream world of the Tojin. At the same time, it also examines how the author used *jiguchi* (paronomasia) based on *Kabuki*, *ningyo joruri*, popular songs, and the customs of the era to playfully depict the *Tojin* in comparison to Japanese people.

Key words: Kantan's dream, The First Dream of Kantan's Pillow, machinery, Tojin, *Ningyo joruri*, The Battles of Coxinga, The Stolen Crystal Jewel, *jiguchi*

- 一. はじめに
- 二. 刊年の再考
- 三. 物語の梗概と典拠の利用
- 四. 唐人行列の利用
- 五. 「唐人の」邯鄲の夢
- 六. 見世物としての唐人の夢
- 七. おわりに

一. はじめに

「邯鄲の夢」「邯鄲の枕」「一炊の夢」ともいう)は故事としてよく知られている。盧生という儒生が邯鄲の邸舎で仙人の呂翁が持つ枕に伏し、波乱に満ちた人生を送ることを夢見た後、この世のことを悟りきったことを意味し、唐代伝奇『枕中記』(沈既濟)がその出典である。

一方、日本の『太平記』(流布本)巻二十五「自伊勢進宝劍事付黄梁夢事」⁽¹⁾は『枕中記』の故事とは異なり、仙人の呂洞賓が富貴を願う客の心を見抜き、将相にのほり、姫宮を娶り、五十年の富貴栄華を楽しんだ後、洞庭の遊船のときに妻子ともに入水したという夢を客に見せ、栄華のはかなさを悟らせた⁽²⁾と記される。謡曲『邯鄲』⁽³⁾もまた、仏道を欣求する盧生が邯鄲の旅亭に女主人が持つ枕を借り、楚国の王となり五十年の栄華を楽しんだ夢を見て醒めた後、悟りを得た⁽⁴⁾といい、元来の故事から変化していることがわかる。

近世では、邯鄲の夢を趣向とする作品はおおむね右の三種を土台としている。たとえば黄表紙の嚆矢である『金々先生栄花夢』(恋川春町作、一七七五)は、正しく右の謡曲『邯鄲』に基づいて創作されたものである。「邯鄲の夢」は多彩な形で流用され⁽⁵⁾、それによって膨大な作品群が

形成されてきたのだ。

本稿で取り上げる未翻刻資料黒本『初夢かんだんの枕』(十五丁 著者・画者不明 山本九左衛門 大東急文庫蔵⁽⁴⁾) (以下、黒本『初夢』と略称する)では、異国を舞台とする近松門左衛門の浄瑠璃及び唐人行列にかかわるものなどを積極的に取り入れ、異国情緒ある「唐人の邯鄲の夢」が巧みに表現された。このような発想は、邯鄲の夢を趣向とする作品群において極めて珍しい。

本稿では、作品の刊年を改めて確認し、本文の典拠を明らかにした上で、黒本『初夢』から「邯鄲の夢」の故事の受容を考察し、そしてそこで表現される江戸時代の対「異国」観や、そのイメージの変容について論ずる。

二. 刊年の再考

著者や画者が未詳である黒本『初夢』は、大東急記念文庫に所蔵される。書誌情報については、すでに大東急記念文庫善本叢刊第四巻『赤黒本青本集』に影印と中村幸彦の解題があるため、ここでは刊年に対する私見を述べる。

中村幸彦は解題⁽⁵⁾に、「『朝倉年表』(『新修日本小説年表』)、『山崎年表』(『日本小説書目年表』)ともに、黒本の部では年代未詳とする」と述べ、

画外題に蝶と千鳥の図を配してある。これを酉の年のしるしとすれば明和二年乙酉刊。本書の中心をなす唐人行列は、明和元年十一月の琉球人の来朝に想を得たものであろうか。

と指摘した。一方、高橋則子⁽⁶⁾は『初夢』の書名が載る新板広告(岩崎文庫蔵『酒田公時大和廻』巻末)にある黒本「其緞そのじゆん从助六」を考察

する際、同じ広告にある作品は同書肆、同年刊のものだという定説を踏まえて広告にある他の作品の刊年を確認したが、墨書に「宝暦四年」と示す作品があるものの、「宝暦四（一七五四）年」と断定できる根拠はない⁽⁷⁾と述べた。高橋則子は絵外題に着目し、絵外題の意匠は宝暦三（一七五三）年に始まる曾我祭と関連する可能性が高いと指摘する。そして、登場人物の衣装の模様という視点から、宝暦五年春市村座上演の歌舞伎「儘愛護會我」（堀越二三治 ほか）が黒本「其綾从助六」の影響を受けた可能性が高いとし、「其綾从助六」及び一連の作品は宝暦五（一七五五）年以前、宝暦三年以降、すなわち宝暦四年である仮説を立てた⁽⁸⁾。

両氏の説を踏まえ、『酒田公時大廻』の巻末の看板広告の左下隅に書かれた絵師の連名、すなわち「ゑし 鳥居清信 鳥居清満 鳥居清重」に注目したい。水谷不倒は鳥居派の連名について、

宝暦になってから、黒・青本の奥に、絵師の連名——鳥居派に限り——を掲げたものがある。〈略〉清信は宝暦二年（其前のことは不明）から同四年までの筆頭に据り、清満、清重が其次に居並び、六年以下清信の名が削られて、其代りに清倍が筆頭に据り、同十二年までつづき其以後は清満が筆頭となっている⁽⁹⁾。

と述べた。諸作を確認した⁽¹⁰⁾結果、この論述と一致する。黒本『初夢』は宝暦元（一七五一）年から宝暦五（一七五六）年までの間に刊行されたことが確認でき、高橋則子の仮説に合致している。

ところが、黒本『初夢』の四丁裏・五丁表に次のような文がある。

○（四丁裏・五丁表）とふやらたうふうの四だんめのだ六が大みやうになるやうだ。これから八まん大わうだ。

「どうやら道風の四段目の駄六が大名になるようだ」が意味するのは、宝暦四年十月に大阪竹本座で初演された義太夫浄瑠璃「小野道風青柳硯」（竹田出雲・吉田冠子・中邑閏助・近松半三・三好松洛の合作）の四段目、つまり独鈷の駄六が流罪にしたはずの陽成天皇と、基経をはじめとする公家たちを皆殺しにしまった功により、大名に取り立てられたことに由来するのではないか。そうであるならば、黒本『初夢』は「小野道風青柳硯」が初演された（宝暦四年十月）以降、宝暦六年以前、すなわち宝暦五（一七五五）年正月の刊行となる。

三．物語の梗概と典拠の利用

まず、本文の検討を行う前に、黒本『初夢』の概要を示しておきたい。（二丁表）楚国の羊飛山に尊い仙人がいることを聞いた蘆生は、八百屋の商いをしながらそこを訪ねた。（一丁裏～三丁表）蘆生は草深い庵に入り、一晚泊してもらおうように頼んだところ、邯鄲という土地の庵に住む仙人呂翁が枕を与え、蘆生に一生の夢を見せた。（三丁裏～五丁表）夢の中では、楚国の大王が蘆生に娘を与え、位を譲ろうと、楚国より勅使を派遣した。蘆生は楚王の装束を着て、輿車に乗り楚国の内裏へ向かう。（五丁裏～十一丁表）行列は長く続く。（十一丁裏～十三丁表）蘆生は楚王の娘と偕老同穴の語らいをなし、六国から貢物を受けた。（十三丁裏～十四丁表）蘆生は菊の宴を催し、千人のきさきをつれ、酒や舞遊を楽しむ。（十四丁裏～十五丁表）五十年の栄華の後、夢から覚めた蘆生は悟りを開き仙人の術をうけて長寿になった。

このように黒本『初夢』は、ほぼ謡曲『邯鄲』を土台にして創作されているが、たとえば楚王の娘を娶るなど、いかにも『太平記』の黄梁夢故事の筋を引き取ったように読める箇所が見受けられる。そこで、黒本『初夢』の根幹となる筋がどのように組み込まれたのか、謡曲『邯鄲』の詞章を利用する部分から検討したい。

(1) (一丁表) これはしよくのかたわらにろせいと申ものなり。われ人げんに有ながら、たゞばうぜんと明しくらす。

(2) (十二丁裏・十三丁表) ひがしに三十余丈に、しろかねの山をつかせては、こがねの日りんをいたされたり。西に三十よちやうにこがねの山をつかせては、しろかねの月りんをいだされたり。

(3) (十三丁裏・十四丁表) のめばかんろもかくやらんと

(4) (十三丁裏・十四丁表) じゆみやうは千代ぞときくの酒

(5) (十三丁裏・十四丁表) へわかやどの、きくのしら露、けふことに、いくよつもりて、測となるらん。

それぞれ謡曲『邯鄲』の以下の詞章⁽¹⁾が利用されている。

(1)*是はしよくの国のかたはらにろせいと申者也。我人間にありながら仏道をもねかはず。たゞはうせんとあかしくらす。

(2)*ひかしに三十余丈にしろかねの山をつかせては、こかねの日輪をいたされたり、西に三十余丈にこかねの山をつかせては、しろかねの月輪を出されたり。

(3)*のめはかんろもかくやらんと

(4)*寿命は千代ぞときくのさけ

(5)*我やとのく菊のしら露けふことにいく世つもりて測となるらん

利用された謡曲『邯鄲』の詞章がどの底本に基づくかは断定し兼ねるが、落合博志が考察した八つの活字本にある『邯鄲』⁽²⁾と比較しながら、『鴻山文庫の研究 謡本の部』の書誌的考察も考慮しつつ、底本の検討を試みた。具体的には、野上記念法政大学能楽研究所デジタルアーカイブや国立国会図書館デジタルコレクション蔵の鈔写謡本と版行謡本の影印を活用し、伝観世小次郎信光筆謡本、堀池父子節付観世流謡、光悦謡本上製本、光悦謡本特製本、光悦謡本色替り本、寛永卯月本、宝生流現

行謡本、吉川家旧蔵車屋本、下掛り三流諸本を参照して考察してみた。諸本において、(1)*では「ろせいといへるもの」と「ろせいともうすもの」と、「これはしよくのくに…」と「抑これはしよくのくに…」との差異があり、(2)*では「月輪」と「月光」との異同があり、また(5)*では「ふち」と「測」の区別がある。そうした差異を含めて考察した結果、黒本『初夢』の詞章と最も合致しているものは伝観世小次郎信光筆謡本である。従って、本書にある謡曲の詞章は室町時代後期の観世元頼系統の章句本、もしくはその系統を汲む謡本による可能性が高いと思われる。

このように、黒本『初夢』では謡曲『邯鄲』の詞章の利用が多数見受けられる。併せて十二丁裏から十四丁表にかけて、上述の詞章が挿絵の形で鮮やかに描かれている点も特筆すべきであろう。なお、謡曲『邯鄲』の要素を挿絵に溶け込ませる手法も用いられる。たとえば十一丁裏の右下に「不老門」、十二丁裏の右上に「長生殿」、十二丁表の左上に「阿房殿」と書かれる看板がある。これは謡曲『邯鄲』にある宏大な宮殿を描き出しているのである。また十三丁裏・十四丁表に描かれた、菊の園で菊の宴を催す風景はまさしく謡曲『邯鄲』の詞章、「菊の盃。とりどりにいざや飲もうよ。廻れや盃の。く。流れは菊水の流に引かれたとく過ぐれば」の絵画化であると言えよう。

いっぽう、本文には謡曲『邯鄲』にない要素や筋も混在している。十二丁裏・十二丁表には次のような文がある。

○(十二丁裏) すてにろせいそこの大わうになりしかば、くにぐよりみつきものをさ、げそんけうする。めしによつてさんだい仕る。わたくしはろのくにのものてこさります。つぎは多のくに、ごこのくに、しんの國、さてぎのくに。

○(十二丁表) ろせいは一天ばんじやうのくらるにのぼり、そわうの御娘とかいらうとうけつのかたらひをなし、さかへける。

六国が来朝し、貢ぎ物を捧げるといふ筋は、『太平記』の黄梁夢故事の独自の描写、すなわち「蛮夷率服し、諸侯の来朝する事、只秦の始皇の六国を合、漢の文恵の九夷を随へしに異ならず」に基づき、潤色を加えたもののように思われる。そして楚王の娘を娶ることも同様に、「第一の姫宮を客に妻せ給ひければ」に依拠すると考えられる。

ここで問題となるのは、なぜ謡曲『邯鄲』の内容を踏襲した上で、『太平記』の黄梁夢故事の要素を取り入れたのかという点にある。結論から言えば、近松浄瑠璃の詞章の引用、またその引用内容を描いた挿絵と組み合わせることによって、読者にとってより想像しやすい形で謡曲『邯鄲』を表現する意図があったからだと考えられる。

三丁裏に次のような文がある。

○(三丁裏)まづくしやうぞくをおめしなされませ。ふたへのにしき、ひのしやうぞく、しよほうのかんむり、かもんのくつ、さんごこはくの玉のをび、ばくやのけん。まづこれでござります。

近松門左衛門の浄瑠璃「国性爺合戦」(正徳五(一七一五)年大阪竹本座にて初演)の三段目に、

武運開くる唐櫃の、二重の錦羅綾の袂緋の装束、章甫の冠花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帯莫耶の剣黄金をみがき、絹傘さつとさしかくれば、
(略)

とあり、和藤内が延平国王性爺鄭成功と号して装束を召す場面の文句がその典拠となる。また、十二丁表に、

○(十二丁表)くわげんけいしびんせき、めんかうふはいの玉、さんこの枝をり、ふらうふしの酒、いろくのさ、げもの

とあるが、この部分の典拠は近松門左衛門の浄瑠璃「大職冠」(正徳元(一七一一年)年大阪竹本座にて初演)にある。

唐朝に伝はる花原磬泗浜石。面向不背の玉此三つの宝を。結納の引出物にて和国に渡し。姫を迎へ取るべしとの返牒也。

唐朝もくしは明国を舞台とする両作の詞章は、中国故事の「邯鄲の夢」を表現する良き材料として用いられたのだろう。それよりも重要なのは、これらの詞章とそれに伴う挿絵が「邯鄲の夢」の先行作にある筋と組み合わせること、読み手に浄瑠璃の芸を想起させる点にある。すなわち、和藤内が延平国王性爺鄭成功と号することは盧生が楚王になることと類似しているため、これを通じて和藤内が装束を召す場面につながる。類似の場合もまた、中臣鎌足の娘を迎えることと楚王の娘を娶ることは類似している。婚礼の引出物を渡すために万戸將軍が日本に渡ってきた筋と、諸侯の来朝という『太平記』の筋に基づき、結婚お祝いの捧げ物を献上するために六国が来朝するという潤色を加えた当該作の設定とは、対照的ながらも類似しているようにも読める。

このように、黒本『初夢』のなかで『太平記』黄梁夢事や謡曲『邯鄲』、近松浄瑠璃を取り入れたのは、「邯鄲の夢」の故事の本筋を保持しつつも、異国を舞台とする浄瑠璃の詞章とそれを描く挿絵を持ち込み、類似点のある人物や筋を重ね合わせることで、読み手に浄瑠璃の舞台を想起させ、唐人の邯鄲の夢の世界をより想像させやすくする意図があったからだと考えられる。

四. 唐人行列の利用

次に、挿絵について述べていく。中村幸彦が指摘するように、黒本『初

『夢』は「全体の唐風の絵が、第一の見所、おどけた書入の多い、盧生を
迎えの行列が、六丁分にも渡っている⁽¹³⁾」。謡曲『邯鄲』では、楚国
より勅使が迎えに来て、盧生を御輿に乗せると、話が突然楚国の宮殿の
描写へと飛ぶ。黒本『初夢』の作者は、その間にある物語展開の可能性
を踏まえ、迎えの行列を配置したのだと考えられる。しかし黒本『初夢』
の行列の場面は何を参照して創作したのか。たとえば、朝鮮通信使来朝
行列、琉球使節来朝行列、そして祭礼行列に朝鮮通信使来朝行列を真似
する仮装行列などが考えられるが、本論では中村幸彦の見解を踏まえた
上で、琉球使節来朝行列ではなく、朝鮮通信使行列を真似する仮装行列
であるという仮説を提示しておきたい。その理由は、次の二点である。

第一に、黒本『初夢』の唐人行列には、当時の琉球使節行列の旗では
なく、朝鮮通信使の特徴を有した旗が数本描かれている。例えば四丁表、
五丁裏に「清道」と書かれる先頭を切る「清道旗」と、四丁表、六丁裏
に昇龍を描く形名旗と、七丁表に「巡視」と書かれる「巡視旗」と、七
丁裏に「令」と書かれる令旗などである⁽¹⁴⁾。特に、形名旗は琉球使節
の旗とは著しく異なる。横山學は、正徳元（一七一）年の朝鮮通信使
の渡来を控え、また朝鮮と琉球の格の違いを明らかにするために、幕府
は宝永七（一七一〇）年度の琉球使節と朝鮮通信使への待遇の違いを設
けた⁽¹⁵⁾と指摘する。留意したいのは、朝鮮通信使は一对の「龍旗」を
使用するが、宝永七年以降の賀慶使・謝恩使の行列では、本来寛文
（一六七）年度の「龍旗」「寅旗」各一本から一对の「寅旗」になっ
た⁽¹⁶⁾という点である。黒本『初夢』では「寅旗」がなく、「龍旗」が
あるため、琉球使節来朝行列をもとに制作した可能性が低いと言える。
しかし、朝鮮通信使来朝行列の影響か、それを真似する仮装行列の影響
なのか、ここで判別することは難しい。

そのため、行列に琉球使節や朝鮮通信使行列にいない人物の登場を指
摘することで、論証していきたい。まず、十一丁表に馬に乗り煙管で煙

草を吸う人が登場する。鞍の後ろには鶏と豚のような動物が置かれる。
そしてその近くには「これはそこのかたわらにすむたい所たうじんに
て候」という地の文がある。つまり、この人物は台所唐人（「賄唐人」
ともいう）である。ロナルド・トビは次のように述べる。

朝鮮通信使が来日すると、〈略〉下官たちは米・味噌・醤油など現
物で支給されたので、物々交換によって足りない分を入手し、宿泊
の寺などで自炊した。そういう交換をする人を、日本人がやがて祭
りの「賄い唐人」と呼ぶ、パフォーマンズのキャラクターに仕立て
るようになった⁽¹⁷⁾。

さらにロナルド・トビは、「賄い唐人はいつ祭りに取り入れたかは定
かでないが、図像としての初見は英一蝶による「賄い唐人⁽¹⁸⁾」であろ
う⁽¹⁹⁾」と述べる。たとえば「土浦御祭礼之図」に、鞍の付近の籠に兎
が置かれ、馬上に生肉を食べている唐人の姿が描かれている⁽²⁰⁾。つまり、
台所唐人は朝鮮の肉食の食文化を際立たせるために仮装行列に設置され
た、朝鮮通信使行列に実在しない人物なのである。

賄い唐人のほかには、七丁裏に「わしはたうじんのゑまうりだが。百
でやとはれてきました」という一文から「唐人の絵馬売り」が登場する
ことがわかる。おそらく唐人の扮装をして唐人行列を描く絵馬を売る人
を指しているのだろう⁽²¹⁾。

そのほか、黒本『初夢』の作者はさらに輿車、文官武官、儀式用具、
路次楽、小童など、朝鮮通信使来朝行列と共通する様々な要素を加えた。
黒本『初夢』では祭礼にある仮装行列をはじめ、朝鮮通信使行列の影響
を受けて生まれた種々な風俗が意欲的に持ち込まれ、賑やかな唐人が
揃ったパレードが再現されたのだと考えられる。

五 「唐人の」邯鄲の夢

本節に入る前に、次のような問題を考えてみたい。「国性爺合戦」「大職冠」が唐朝、明国を舞台とし、「邯鄲の夢」の先行作の筋と類似する点があるために取り入れられたとするならば、朝鮮通信使行列を模倣する仮装行列は何をもつて用いられたのか。それを考える上で重要なのは、ロナルド・トビの指摘である。

江戸中・後期までに、近世初頭にはつきりと区別されていた「韓・朝鮮・高麗」「琉球」「明・清」や、南蛮・紅毛の欧米人が、元々朝鮮通信使の真似をする祭礼を媒介して、全世界の異国人を総括して、「唐人」と呼ぶ様になった⁽²²⁾。

朝鮮通信使↓祭礼の唐人行列↓唐人↓明・清人というように、朝鮮通信使来朝行列が起源とされる唐人行列は媒介として、明・清人に辿り着き、中国故事の「邯鄲の夢」と接点を持つようになったのだという。

しかし、ロナルド・トビの推論が妥当であれば、「国性爺合戦」「大職冠」の利用も見直す余地がある。例えば黒石陽子は、十八世紀に大阪で上演された義太夫節のなかで東アジアを扱った作品を挙げ、朝鮮通信使来朝や異国への関心が注がれた浄瑠璃の制作の経緯を実証し、正徳元(一七一)年の朝鮮通信使来朝を当て込んで制作した近松作の「大職冠」⁽²³⁾の影響の大きさと、同じく近松作の「国性爺合戦」(一七二五)の大当たりの影響の大きさをも指摘した⁽²⁴⁾。実際には、こうした人形浄瑠璃の中では中国を異国として登場させ、なおかつ朝鮮通信使という素材は好んで用いられてきた。これに対し原道生、朴麗玉⁽²⁵⁾は、特に「国性爺合戦」「大職冠」について詳述している。

また、「国性爺合戦」を利用したと見られる黒本『初夢』の一方所について補足する。十丁表に次のような一句がある。

○(十丁表) ばんのれうりは、りうがんにくのめし、しるはふたのこくしやう、ひつじのはまやきであらふ。

この一句の典拠は「国性爺合戦」三段目にある。

いや申し如在もなうお料理も念入り・龍眼肉のお飯・お汁は鶯の油揚・豚の濃漿・羊の浜焼き・牛の蒲鉾、さまざまにしてあげても、なういまくしい

興味深いことに、『朝鮮人來朝物語』(京寺町松原上ル町 菊屋七郎兵衛板 延享五(一七四八)年京都大学附属図書館蔵)⁽²⁶⁾にも類似する表現が記されている。延享五年の『朝鮮人來朝物語』の最後に、海上の船、調理の場、耳塚、富士山、將軍謁見など、朝鮮通信使来朝行列の道中見聞や暮らしの場面を描く挿絵が付されている。その中で「大阪宿津村御堂だい所の図」に調理の場面が描かれた。そこに次のような文がある。

ひつじのはまやきをする
ぶたはこくしやうにいたしざるはおすいものにいたそう
此にはとりはおめしにせふ

このように、朝鮮通信使一行の料理と浄瑠璃「国性爺合戦」における唐人の料理は、類似する描写によって表現されたことが確認できる。両者の影響関係は断定できないが、少なくとも「唐人」と朝鮮通信使との間に、イメージの共有が認められていたのであろう。そもそも「国性爺合戦」の鳥獣肉料理は、朝鮮通信使における朝鮮の食文化⁽²⁷⁾に由来する可能性はないだろうか。

こうした状況を踏まえると、黒本『初夢』の唐人行列と異国を舞台とする浄瑠璃の内容は、ともに朝鮮通信使と関わりながらも、朝鮮通信使の範疇をこえて、異国人を描出する要素として見るべきである。そしてこの異国人たる者は、当時「唐人」という言葉で呼ばれていた。つまり作者は、朝鮮通信使の影響を受けて形成した舞台やパレードを生かし、唐人の大きな夢の世界を創ったのである。

六・見世物としての唐人の夢

さて、「唐人の」邯鄲の夢を描くことで、作者はどのような夢の世界へと読者をみちびくつもりだろうか。本文を確認しながら検討する。

○（三丁裏）此いしやうをきたら、どふも身いこかしがなりますまい。これはどふしてきます、何、かんむりとは、おかしいものだ。

○（四丁裏）さてくきのつまる事じゃ、たぶんこれであるのか、ちつと待給へ、小べんをいたしたい。

○（四丁裏・五丁裏）どふやらたうふうの四だんめのだ六が大みやうになるやうだ。これから八まん大わうだ。

蘆生が国王となり、楚王の装束を召す場面が描かれる。しかし「国性爺合戦」の和藤内の凜々とした姿と裏腹に、黒本『初夢』では蘆生がつぶやいた卑語に、前述した「小野道風青柳硯」が利用されている。それによって、今まで貧乏だった大工独結の駄六が突然大名に立てられたときの馴れぬ大名姿に見立てることを通じて、貧乏だった蘆生が突然楚王になったときの可笑しな姿を描出したのである。

○（五丁表）八百やがこく王になるとは、やをよろづのかみさんたちとおたのしみであらふ。

この一句では、「かみさん」は「上さん」の意に通じ、「おたのしみ」は「御楽」であり、男女の仲がよいことをひやかしている語であり、いずれも性的な仄めかしと見なすべきである。

○（六丁表）めしによつてのおんとも、あづきめしやいもめしやにわとりめしなら、しごくてん。めしづくしをいふな。はらがしやうくよるのあめでも、へいさのらくがんでもかふてたべう。

小豆飯、芋飯と鶏飯を言い連ねる唐人に対して、相手は「飯尽くしを言うな」と怒り、「瀟湘の夜の雨でも、平砂の落雁でも買って食べう」と、瀟湘八景をもじりながら、「落雁」という朝鮮通信使の饗応⁽²⁸⁾に出された菓子を混ぜ込んで言い出したのである。

○（十一丁裏）めしによつてさんだい仕る。

「めし」は地口で「召し」でも「飯」でも意味する。六丁表の例と合わせて見ると、この二点はともに朝鮮通信使の饗応を語り草として用いる表現となる。

○（八丁表）くわげんをしよまうく、ばんにしのば、あみ笠かぶつてしのばんせ、人がとがむるならば、まつはらおさんといはしやんせ、きつねが三びきをが七つ、ひうどろくどんくちゃんくぶうくく。

「編笠被つて忍ばんせ、人がとがむるならば、まつはらおさんといはしやんせ」の部分について、次のような歌謡を挙げておきたい。

今宵忍ぶな^アら、蓑着て笠着て、忍ばんせ。人が咎めた^アら、笥堀や
といはしやんせ。(越前国大野郡勝山町)⁽²⁹⁾

このような類似は偶然ではなく、恐らく宝暦年間ではこの種の小歌の流行が既にあったと考えられよう。黒本『初夢』ではこうした流行歌をもじって、笠子帽を被っている唐人を、編み笠を被って忍び会う男に見立て、唐人を茶化しているのである。その後の「きつねが三びきをが七つ」一句について、たとえば談義本『風流志道軒伝』(風来山人・宝暦十三年)に「扱は魑魅魍魎のしはざか、又は日本にてはやると聞、姫路におさかべ赤手のごひ、狸のきん玉八畳敷、狐が三疋尾が七ツの類ならば、打ものわざにてかなふまじ⁽³⁰⁾」とあり、宝暦年間にはこのような妖怪話が流行したことが窺えよう。黒本『初夢』ではさらに「ひうどろくどんくちゃんくぶうくく」を付け加えた。これは本来唐人行列の路次楽を表しているが、「ひうどろどろ」は前の魑魅魍魎をあらわす言葉と合わせて、幽霊などが登場する際の歌舞伎の下座音楽を想起させる。このように、夜に忍ぶ男・笠帽子を被る唐人・夜に出没する幽霊というような連想ができ、笠帽子を被り、路次楽を演奏する唐人を茶化することにつながったのである。

○(十丁裏) わたしはろせいさんとわけの有おと、でござんす。うり
のかわをくへば、しかられる中でござんす。

○(十丁裏) こしよう吉三もわしがようなきやうでは有まい。ほんに
小姓のそうほんじてござんすわいなハア。

は、
朝鮮通信使一行に小童^{ソウド}と呼ばれる未婚の青年がいる。ロナルド・トビ

これらの小童は、狩野探幽の『東照社縁起絵巻』(寛永十七(一六四〇)年)以来、見物人の関心を集め、また絵師は美女の麗しい美貌と髪型で描きがちであった⁽³¹⁾。

と解釈した。「わけのあるおと」とは、情交関係をもつ弟のことである。「うりのかわをくへば、しかられる」は「若衆瓜の皮食わないか」という男色の相手をしているとして、少年をからかう語から来ている。また「こしよう吉三」はおそらくお七吉三物で登場する美少年寺小姓吉三郎のことを指す。このように、朝鮮通信使の美少年は江戸の男色文化や、歌舞伎で登場する美少年とつながり、揶揄の対象ともなっていた。

○(七丁表) あんまりひやうはくをいふな。たうじんやうでしやうほ
くきこえぬ。

○(七丁裏) ばかなつらなけたうじんだか。

○(九丁表) あんまりたうじん共がばかをつくします。ちとしづかに
いたすやうに申付ましたらよふござりませふ。

○(十一丁表) 此度ろせいの御ともして参り候とは。いやはやしやら
くさい。

右の通り、直接唐人を嘲笑う表現も散見される。異国の舞台とパレードを通じて辛うじて創り上げられた唐人の夢の世界が、歌舞伎、浄瑠璃、そして流行唄と当時の風俗に基づく地口、茶化しなどの利用で「邯鄲の夢」の故事の本筋から逸れていた。しかし邯鄲の夢を戯作に適したものに改変するためには、むしろそうした邯鄲の夢の故事に無い、朝鮮通信使によって生まれた唐人を嘲笑う地口や茶化しが不可欠であろう。当時の唐人の位相について、池内敏の論説を挙げる。池内敏は画像史料の分析を通じて「唐人」の姿を見出すロナルド・トビと倉地克直の論説を挙げ、

近世の民衆は「無髭・月代という、毛髪の少ない自己民族像」の反転像としてのコード画を通じて「唐人」を認識していると指摘し、祭礼行列にある唐人行列は、ただ仮装することで非日常性を創り出すことにとどまり、そこから近世の民衆の対外認識を見出しにくい⁽³²⁾と述べた。なお、池内敏は歌舞伎・浄瑠璃の筋立てのなかに異国・異国人の要素が含まれるものを取り上げ、こうした演劇を観賞した者は、「武威」の日本という「ウチ」の意識や唐人の概念を形成し、そして朝鮮など異国という「ソト」の関係から、相対的な意味での「日本人」意識を持つようになった⁽³³⁾とも指摘した。つまり、当時の唐人像は「ウチ・日本人」と対置されるイメージと見るべきである。

要するに、近世の民衆は「ウチ・日本人」と対置される唐人を創造し、唐人の物語によって自らのアイデンティティの確立に至ったのである。黒本『初夢』はそれを生かして、近世文芸、風俗によって育まれた「ソト」の異国イメージを見世物にし、「ウチ」の眼差しで捉えたことで戯作の笑いを醸し出した。正月に刊行された黒本『初夢』は、非日常的な唐人の持つ滑稽さを描写することで、江戸の読者に唐人ならではの笑いをもたらしたのではないか。

七. おわりに

以上のように、黒本『初夢かんだんの枕』を異国イメージという視点から論じてきた。黒本『初夢』は、歓楽の夢を色里の夢に書き替えた『金々先生栄花夢』などのような諸作品とは、全く異なった特徴を持つ。

黒本『初夢』は、十七、十八世紀に江戸の人が見た朝鮮通信使行列に触発されて流行した唐人の仮装行列のイメージと重なり、近松浄瑠璃『大職冠』『国性爺合戦』の詞章を利用し、多くの近世文芸や風俗などを借りて戯けた書入れがなされた結果、邯鄲の夢は唐人、唐人行列を通して見世物にされ、読者に唐人ならではの笑いをもたらしたのである。

このような背景がありながらも、黒本『初夢』は、朝鮮通信使の来朝がもたらした異国への関心に基づいて書かれており、それは当時の風俗や文化を映し出している。「邯鄲の夢」を趣向とした作品群において、黒本『初夢』は特筆すべき作品と評価できる。

後世の「邯鄲の夢」の受容作である黄表紙『見得一炊夢』（朋誠堂喜三三 天明元（一七八一）年）にも、主人公が長崎に行き、唐人から書画を習うという筋が描かれる。そこには、黒本『初夢』とは異なる唐人の姿が登場している。近世における「邯鄲の夢」の受容を考察する際に、唐人の描写に着目することで、新たな解釈の可能性を探ることができよう。

（凡例）謡曲『邯鄲』の諸本の異同に関する注釈は小山弘志 佐藤健

一郎校注・訳『謡曲集(2)』新編日本古典文学全集五九（小学館、二〇〇七年）より引用した。

浄瑠璃『国性爺合戦』の本文は鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注・訳『近松門左衛門③』新編日本古典文学全集七六（小学館、二〇〇〇年）より引用した。

浄瑠璃『大職冠』の本文は松崎仁・原道生・井口洋・大橋正叔校注『近松浄瑠璃集上』新古典日本文学大系九一（岩波書店、一九九三年）より引用した。

注

(1) 古態本では卷二十六に位置する。また『太平記』の成立は「応安（一二六八）から永和（一二七九）年間にかけてのことと考えられている」。大坪亮介『南北朝軍記物語論』（和泉書院、二〇二〇年二月）三〜四頁を参照。

(2) 謡曲『邯鄲』の成立は未詳だが、曲名の初見は康正二（一四五六）

- 年に金春禪竹が著わした『歌舞髓脳記』である。天野文雄『能楽手帖』(角川文庫、二〇一九年九月)一三二頁を参照。
- (3) 白川和子『金々先生栄花夢』の典拠について(日本文学研究(四一)、二〇〇二年二月)にある『金々先生栄花夢』以前の「邯鄲の夢」の趣向作の一覧表を参照。
- (4) 中村幸彦編・解説 大東急記念文庫善本叢刊第四卷『赤本青本黒本集』(大東急記念文庫、一九七六年)。
- (5) 前掲書(4)、解題十六〜十七頁。
- (6) 高橋則子「其綬从助六」(前号所収)に関する訂正(『叢』第八号、一九八五年四月)。
- (7) 『酒田公時大和廻』巻末の新版広告にある諸作品の刊年の考察を加えておく。『忠孝盲敵討』について、細谷敦仁は高橋則子の論を踏まえ、宝暦四年の刊行だろうと推測した。(細谷敦仁『新版 忠孝盲敵討』について(『叢』第二六号、二〇〇五年二月)二二頁を参照)。「舊昔鬼岩屋」について、木村八重子の解題によれば、「宝暦四年とする根拠不明」「墨記に「宝暦四甲戌年」(見返)」など、墨記による刊年の確定は根拠に欠けるという。(木村八重子『未紹介黒本青本(二八)』(日本古書通信七七(一一)、二〇一二年十一月)三一頁を参照)。「増補中将姫」について、高橋前掲論文(6)に、『改訂 日本小説書目年表』黒本の部に宝暦四甲戌年出版と記載されたが、刊記がないため、根拠未詳だと説明している。また、加賀文庫所蔵の原本を見る限り、上中巻表紙の次の頁に「宝暦四甲戌年」の墨記のみで、その根拠は未定である。
- (8) 高橋前掲論文(6)、六四〜六五頁。また、断定できない理由の一つとして、同論文の六四頁に「『日本小説書目年表』黒本の部に、宝暦四年刊・山本版のものとして、『丹後国鐵焼地蔵』が記載されている。大東急記念文庫本のみが現存し、その題簽には「戊年新版」の角書があり、これを元に刊年推定したものと思われる。この題簽の意匠図案は、雪持ち笹であり、これは『青本絵外題集I』(岩波文庫貴重書叢刊)には、宝暦十二年とされているものである。即ち「丹後国鐵焼地蔵」も、宝暦四年刊とは断定できない」と記される。
- (9) 水谷不倒『水谷不倒集 第二卷』(中央公論社、一九七三年)六〇頁。
- (10) 宝暦二年の新版広告『猿塚物語』(東洋文庫蔵)に絵師の連名は「繪師 鳥居清信 鳥居清満」であり、宝暦六年の新版広告(『播州曾根松』(東洋文庫蔵)に絵師の連名は「繪師 鳥居清信 鳥居清満」となる。
- (11) 法政大学能楽研究所デジタルアーカイブ蔵伝観世小次郎信光筆話本を参照。
- (12) 落合博志「能楽研究における文献学の問題(特集 文献学をとらえ直す)」(日本文学六九(七)、二〇二〇年七月、二二〜二九頁)。
- (13) 前掲書(4)、解題十七頁。
- (14) 朝鮮通信使行列について、辛基秀 ほか著『朝鮮通信使絵図集成』(講談社、一九八五年十月)、辛基秀『新版 朝鮮通信使往来—江戸時代二六〇年の平和と友好』(明石書店、二〇〇二年二月)、京都文化博物館・京都新聞社編集『二一世紀記念特別展 こころの交流 朝鮮通信使—江戸時代から二一世紀へのメッセージ』(京都文化博物館・京都新聞社、二〇〇一年四月)を参照。
- (15) 国立歴史民俗博物館編集『企画展示 行列にみる近世—武士と異国と祭礼と—』(国立歴史民俗博物館、二〇一二年十月)一一五頁。
- (16) 前掲書(15)、一一五頁。久留島浩『描かれた行列—武士・異国・祭礼』(東京大学出版会、二〇一五年十月)一七二〜一八〇頁に詳しい論述と画像がある。また、琉球人行列について、渡辺美季「琉球人行列と江戸」(『日本近世生活絵引 琉球人行列と江戸編』、神奈川県立日本常民文化研究所非文字資料研究センター、一三五〜一四八頁)を参照。
- (17) ロナルド・トビ「朝鮮人來朝図」の図像学(『横田冬彦『異文化交流史の再検討—日本近代の〈経験〉とその周辺』平凡社、二〇一一年五月)二八五頁。
- (18) 英一蝶の賄唐人図について、国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2554323?tocOpen=1>)を参照。また、英一蝶の絵について、糟谷政和は「馬上の朝鮮通信使風の人物が煙管で煙草を吸い、馬上で台帳を広げ、そろばんを下げ、鞍の横や後ろに動物が置かれた絵になっている」と指摘した。(糟谷政和「江戸時代土浦祭礼絵巻の中の朝鮮通信使仮装行列について」(人文コミュニケーション学論集(二二)二〇一六年九月)一〜七頁)。
- (19) ロナルド・トビ前掲論文(17)、二八七頁。

- (20) 土浦市立博物館『にぎわいの時間―城下町の祭礼とその系譜―』（土浦市立博物館、一九九二年十月）六八頁。
- (21) 朴麗玉は『大職冠』の章段を挙げて、朝鮮通信使の行列図は、ニューズ性をもって早くより瓦版などが発行され、屏風や絵巻、絵馬としても制作されるほど流行したと述べた。（朴麗玉「近松の作品と朝鮮通信使―「大職冠」の場合」（国語国文八十（三）、二〇一二年三月）二四頁）。
- (22) ロナルド・トビ「近世日本の庶民文化に現れた朝鮮通信使像」（『韓一一〇号、韓国研究院、一九八八年）一四二頁。
- (23) 『大職冠』の世界と朝鮮通信使との関連について、原道生「『大職冠』論（二）―近松の『大職冠』―」（原道生『近松浄瑠璃の作劇法』（八木書店、二〇一三年十一月）三〇一―三五五頁）を参照。
- (24) 黒石陽子「人形浄瑠璃に描かれた東アジア」（平成25年度広域科学教科教育学研究経過報告書、東京学芸大学、二〇一四年三月）四―五頁。
- (25) 朴麗玉前掲論文（21）、原道生「近松の対「異国」意識」（原道生前掲書（23）を参照）。
- (26) 菊屋七郎兵衛板の朝鮮通信使行列関連のものが他に正徳元（二七一―）年の『朝鮮人來朝物語』（野田市立図書館）、宝暦十三（二七六三）年の『朝鮮人來朝物語』（早稲田大学図書館）がある。
- (27) 高正晴子『朝鮮通信使をもてなした料理―饗応と食文化の交流』（明石書店、二〇一〇年六月）を参照。
- (28) 高正晴子前掲書（27）を参照。
- (29) 大和田建旗『日本歌謡類聚・下巻』（博文館、一八九八年）七二六頁。また高野辰之編『日本歌謡集成』巻十一（東京堂、一九四二年）五五六頁にも類似する小唄が見られる。
- (30) 風来山人『風流志道軒伝』名著文庫巻九（富山房、一九〇三年）六九―七〇頁。
- (31) 前掲書（15）、九二頁。
- (32) 池内敏『大君外交と「武威」』（名古屋大学、二〇〇六年二月）一六九―一七一頁。
- (33) 池内敏『唐人殺し』の世界―近世民衆の朝鮮認識』（臨川書店、一九九九年五月）一三三―一五五頁。

二〇二二年九月二九日 受付
二〇二二年二月二日 採択決定